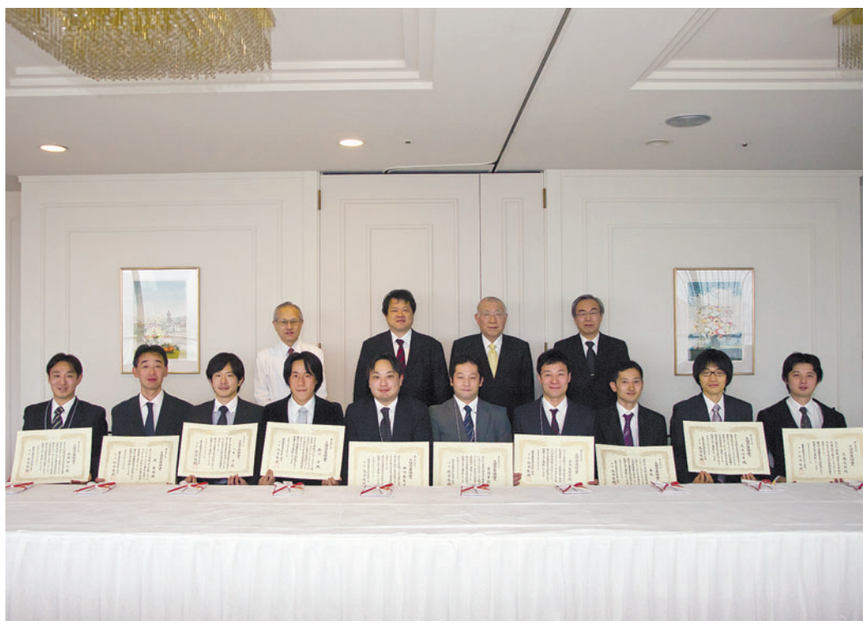
慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　比企　能樹
毎月　１回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●診療時間＝午前9時～午前11時
●電話＝(3353)1211(大代表)

第91回 慶應医学会総会開催

10名が三四会奨励賞を受賞



平成23年11月11日(金)午後13時30分より、慶應義塾大学病院新棟11階大・中会議室において、第91回慶應医学会総会・シンポジウムが開催された。

末松会長の開会の辞により開会し、続いて平成22年総務報告・平成23年中間報告（末松会長）、平成22年会計報告・平成23年中間会計報告（岡田理事）、平成24年予算（案・末松会長）が行われ、承認された。

その後、三四会奨励賞授与式が行われ、比企能樹三四会長より10名の受賞者に表彰状と副賞が授与された。

本年度は臨床医学部分野から6名、基礎医学分野から3名、地域医療・社会貢献分野から1名の三四会員が受賞した。中でも、昨年度3名だった臨床医学分野に6名もの受賞者があったことは、近年の基礎医学の発展に加えて、臨床医学分野での躍進を裏付けるものであり、慶應医学が理想とする「基礎・臨床一体型の医学・医療の実現」に向けて着実に歩みを進めている証だと受け取れる。

医学会総会と併せて開催されたシンポジウムでは、京都大学iPS細胞研究所所長の山中伸弥教授、内科の福田恵一教授、理化学研究所網膜再生医療チームの高橋政代チームリーダー、生理学教室の岡野栄之教授が登壇し、「再生医学」をテーマに、公園・シンポジウムを行った。このシンポジウムの様子は次号（12月号）にて掲載予定。三四会奨励賞受賞者からのコメントは2面に掲載している。

Ⅰ 臨床医学分野

1．八木　洋（77回）
「臓器脱細胞化技術を用いた肝再生療法の開発」

2．西本 祥仁（82回）
「遺伝性血管性白質脳症(CARASIL)家系における新規ミスセンス変異の同定と分子生物学的変化の検討」

3．中川 敦夫（78回）
「うつ病治療の有効性・安全性に関する実証研究」

4．三上 洋平（85回）
「炎症性腸疾患モデル動物病態形成におけるTh17/Th1pathwayの重要性とTh17/Th1バランス制御機構の解明」

5．安岡 秀剛（76回）
「強皮症の線維化機序におけるIGFBP-5 の関与」

6．香坂　俊（76回）
「大規模冠動脈インターベンションレジストリの日米間比較」

Ⅱ 基礎医学分野

1．掛川　渉（76相当）
「D-セリン―グルタミン酸受容体シグナリングによるシナプス可塑性および記憶学習制御」

2．西本 紘嗣郎（76相当）
「ヒト正常副腎および副腎腫瘍における組織構築と機能分化」

3．佐藤 俊朗（76回）
「腸管上皮幹細胞培養技術の確立」

Ⅲ地域医療、社会貢献または三四会活動等

1．辻　哲也（69回）
「がん医療におけるリハビリテーションの普及・啓発」

2011連合三田会大会 三四会講演会

夏を思わせるような好天に恵まれた10月16日、日吉キャンパスで行われた2011連合三田会大会において、3月の東日本大震災を思い、連合三田会のスローガン「深めよう社中の絆、広げよう社中の輪」にちなんで「三色旗のもとに希望の明星を東北の空へ～医学部三四会と被災地の絆～」をテーマに三四会主催講演会が行われた。

比企能樹三四会長の開会の挨拶に続いて、末松誠医学部長より震災直後からの医学部の対応の概要が説明された後、第1次慶應義塾救援医療団団長として3月17日に気仙沼に入った救急医学藤島清太郎准教授（61回）から、震災直後の被災状況、各地から派遣される医療団の活動、被災地で必要とされていた物など救援活動の実際が具体的に報告された。

次に震災と原発災害に見舞われた福島県郡山市の医師会長菊池辰夫先生（44回）と原正夫市長が被災地の現状と今後の課題などについて講演した。郡山市は医師会の助言を受け、大規模災害に備えて市中心部にある開成山野球場の諸施設を避難所に転用できるように、あらかじめ整備していたという。そのため今回の大震災でも、すぐに野球場に対策本部や避難所を立ち上げ、対応できたというお話しには、強い感銘を受けた。講演の最後に3月11日が菊池先生ご自身の誕生日であったことに触れられ言葉を詰まらせた先生に、聴衆一同震災以来奮闘されてきた先生の大変な思いを感じることができた。また原発災害に対して郡山市は、真っ先に小中学校の校庭の表土を剥いで放射線量が下がることを実証した。お二人の講演から将来を担う子どもを守る決意を感じ、日頃の非常時への備えの大切さ、医療と行政との連携のありかたを深く考えさせられた。

桑原敏武渋谷区長、堂園涼子先生（50回）よりコメントをいただいた。

最後に被災地の産業を代表して、銘酒浦霞の醸造元である株式会社佐浦社長佐浦弘一氏が登壇した。塩竈市の酒蔵が津波により大きな打撃を受けたにもかかわらず、震災直後より自社のタンク車による給水活動を行った佐浦は、「地域の復興なくして、自社の真の復興はない」という信念の元に「浦霞発、日本酒のチカラ」プロジェクトを立ち上げ、日本酒の力で地元を元気づける活動を続けているという講演に、地元からの力強い復興への熱意を感じることができた。最後に当番学年60回生を代表して山澤文裕君より閉会の挨拶を述べ講演会が幕を閉じた。

会場に集まった約200名の聴衆とともに、震災の甚大さ、救援活動における諸問題、日頃の備えの大切さ、そして地元の復興への思いなど、多くのことを考えさせられた講演会だった。この講演会は三四会主催で、卒後30年の当番学年である60回生実行委員を中心に企画・運営されたが、応援いただいた比企会長、水野・リー両副会長、古梶理事をはじめ三四会の先生方、およびご多忙中にもかかわらず講演を快諾いただいた末松医学部長、藤島先生、菊池先生、原市長、佐浦社長、および司会を務めたテレビ朝日アナウンサー小川彩佳さん（耳鼻咽喉科小川郁教授ご令嬢）のお力無しには終えることができなかった。皆様のご協力に感謝いたします。

（濱田庸子　60回）

震災後の医学部の対応について説明する末松医学部長

閉会後の会場で記念写真

秋晴れの日吉キャンパスで

万国外科学会における外科学教室の活躍

皇太子殿下ご臨席のもと、去る8月28日から9月1日、パシフィコ横浜にて第44回万国外科学会（International Surgical Week・ISW 2011）が開催された。万国外科学会は外科系では最古の国際的な学術会議で、1905年にベルギーで第1回の会合が開かれて以降、日本での開催は34年ぶり、2回目となる。本会における三四会会員の活躍は特筆すべきものがあり、万国外科学会日本支部事務局長としてその一端をご紹介する。

万国外科学会（International Society of Surgery/Société Internationale de Chirurgie (ISS/SIC)）は、隔年で国際外科週間（ISW）を開催している。この学術集会は国際内分泌外科学会、国際外傷外科学会、国際外科代謝栄養学会、国際乳腺外科学会、そして今回から国際消化器外科学会が会長の北島政樹名誉教授（45回外、国際医療福祉大学学長）の長年の多大な努力で再加入に成功し、その結果ISW2011は、世界60以上の国と地域から約2千人もの外科医が参加する伝統ある大規模な国際学会となりご同慶に堪えない。

本学会本部を組織する会長（Society President）には過去にはKocher、Czerny、Mirizzi、Nyhus等の著明な外科医が名を連ね、今回は南アフリカのKen Boffard会長であった。横浜での会議を運営する開催地組織委員会（LOC）会長に就任したのが北里大学外科の渡邊昌彦教授（58回外）である。国内外の諸学会を取りまとめ、ISW2011を世界的にレベルの高い学術的な成功へ導いたことは勿論、海外からのゲストに日本文化の魅力を伝え接遇する、という大役を立派に成し遂げられた。

皇太子殿下を渡邊会長が先導申し上げ荘厳な開会式典が始まり、学術集会の幕が上った。開会式に続いて日本固有の津軽三味線の吉田兄弟による演奏や、会長招宴では森山良子のステージ、さながらダンスホールと化した会員懇親会のJapan Nightなど、次々とイベントを大盛況なものとした渡邊会長の手腕に多くの参加者が感激したものと思う。

本会では数多くの三四会員が一丸となって渡邊会長を支えたことも大成功の要因といえる。LOC名誉会長は、四年前にモントリオールで開催されたISW2007を学会本部会長として成功させた北島名誉教授である。2004年10月、ニューオリンズでの米国外科学会会期中に開催された万国外科学会理事会でのことである。北島名誉教授の親友で当時万国外科学会会長のR. Siewert教授（ドイツ）と当時の北島副会長が阿吽の呼吸で横浜開催を決めたことが、本会の端緒であった。

またLOC事務局長は2007年4月より本学会日本支部長を務める一般・消化器外科北川雄光教授（外65回）で、北川教授は国際的な業績と本会への貢献が高く評価され今回の総会をもって万国外科学会理事（日本からは一人）に就任することとなった。

万国外科学会でこれまで長く活動し今回の横浜開催にも多大なる貢献をされたのが比企能樹三四会会長（外37回、慶應義塾理事・評議員）である。1993年より日本支部長、97年には万国外科学会理事、2001年と2005年のISWでは副会長として学会の発展に尽力され、2009年には万国外科学会名誉会員に推挙された。万国外科学会日本支部のホームページ（http://web.sc.itc.keio.ac.jp/surgery/gss/iss-sic/）では万国外科学会日本支部ニュースのバックナンバーを1995年の第一号から公開している。その歴史を紐解くと比企会長がISWの日本開催に向けていかに情熱をもって尽力されたかが明快に記されている。

若林剛教授（外61回、岩手医大外科）は国際消化器外科学会理事として北島会長を支えるとともにプログラム編成に大きな役割を果たされた。その功績が評価され渡邊教授とともに、この度、国際消化器外科学会の副会長に就任された。2年後のISW2013はフィンランドのヘルシンキで8月25日から29日に開催予定である。北島名誉教授が副会長に就任することが決っており、国際舞台における慶應義塾のさらなる活躍が期待されるところである。

今回のISW2011は、東日本大震災の影響で当初は開催も危ぶまれた。しかし渡邊会長のリーダーシップと教室員をはじめとするスタッフの熱い思いが結実して、新しい外科学を展望する学術的討論と、海外からの参加者に日本の魅力を実感していただく目的が十二分に達成された。

我が国の外科学の国際的な活動において塾医学部が中心的役割を果たしていることは、大変誇り高きことであり、これもひとえに外科刀林会の山本修三会長（38回、日本病院会名誉会長）をはじめ刀林会員、ならびに三四会員の皆様のご支援の賜物と存じます。この場を借り心より御礼申し上げますとともに、引き続きご指導ご鞭撻いただきますようお願い申し上げます。

（和田則仁　外71回）

平成23年度

中谷比呂樹WHO本部事務局長補をお迎えして 小泉信三記念講座開催

「地球規模での健康格差の是正に向けて 国際社会の出来ること―WHOの挑戦と課題―」

平成23年10月26日、三田キャンパス北館ホールにて、平成23年度小泉信三記念講座が開かれ、中谷比呂樹WHO本部事務局長補（56回）に、「地球規模での健康格差の是正に向けて国際社会の出来ること―WHOの挑戦と課題―」というテーマで御講演をいただきました。

中谷先生は、幼稚舎から慶應に学び、晩年の小泉信三先生のお姿に直接接しておられとのことです。1977年塾医学部卒業後は、2年間の臨床研修を経て、厚生省に入り、早くから、世界に目を向けて医療と公衆衛生の向上に取り組んで来られました。国内・外で数々のポストに就かれ、2007年から、日本人としては初めて、WHO本部事務局長補に就任されています。

以下、講演の概要をご紹介いたします。『健康危機の時代をどう生きるか。その為に、国際機関はなにが出来るか。そして日本はどのような貢献をしつつ、自らの国民を守ってゆけるかは、日本にとって、遠い地球の裏側の話ではなく、「今、ここにある課題」で、福澤先生の思想の根幹である実学の現実的な応用問題である。』というメッセージから講演が始まりました。WHOの活動と組織を紹介した上で、世界の健康の状況、国際保健のパラダイム変化を説明され、ポスト3・11の展望に言及されました。特に強調されたのが、国際保健のパラダイム変化です。即ち、9・11の同時多発テロ以降、不健康が貧困を招き、貧困が不満のはけ口としてテロを呼ぶという悪循環を断ち切る、さらにはグローバル化の負の側面を予防するという意図で保健分野が見直され、国際社会の対応が劇的に変わったということでした。そして、現象面では、エイズ・結核・マラリア対策へ莫大な資金提供（世界基金の創設）、タバコによる健康被害の抑制（タバコ枠組み条約）とグローバル化して人・ものの移動が激しい状況下での健康危機の国際的拡大の抑制（国際保健規則）などの整備をあげられました。これらから見えてくるものは、①相互依存をする世界という認識の醸成、G20に集う新興国や市民社会、患者団体、企業などの台頭、③国際連帯税など新しい財源調達手法の出現、④知財戦略を駆使した医薬品価格低減やタバコ税制や広告規制といった社会政策との連携、⑤地球規模課題への対応力といった今までと違った国力指標の認識、⑥国際基準で国内行政・医療の展開する必要性などです。3・11を契機として、震災対応を進化させ、それを世界に発信してゆく。日本発の安全基準を世界基準にするよう努力する。従前の官主導の国際協力を転換してもっと官民挙げての協力とし、それを永続させるための経済面を含めたインセンティブを組み込む、それが新たな産業分野として国富を増すなど、語るべき夢、実行すべきプロジェクトはたくさんあり、時代の先導者として慶應義塾の果たす役割の重大さを強調されました。

今回の講演会では、一般の塾員の方々に加え、医療・保健分野の専門家の参加が多数みられました。参加者全員が熱心に聞き入り、グローバルな視野・視点から、世界の健康を考えることの大切さ、健康をつくりあげる制度を世界全体で構築していくことの重要性を実感し、講演会は盛会におわりました。

（医学部教授・小泉信三記念講座運営委員　藤田眞幸　65相当）

中谷比呂樹WHO本部事務局長補

講演会後の茶話会にて
前列左側から、中谷比呂樹WHO本部事務局長補、長谷山彰常任理事・小泉信三記念講座運営委員長、比企能樹三四会会長。後列左側から、北島信一前在ジュネーブ国際機関日本政府代表部特命全権大使、武見敬三日本国際交流センターシニアフェロー、戸田健二医療科学研究所専務理事、青木節子総合政策学部教授。小泉信三記念講座運営委員:藤田眞幸・中川種昭医学部教授

鑑賞知来

児童精神医学の第一人者から、「健康な家族」について話を伺う機会があった。米国ティンバーローン精神医学研究財団が30年ほど前に実施した調査に基づく話であり、よく耳にする評論家の眉唾物の話とは違う。調査方法は次のとおり。子供を、問題を生じることなく健康な成人に育てあげた家族（健康な家族）と、子供が犯罪者や薬物依存になるなど、大きな悩みや病を抱えるように育ってしまった家族（不健康な家族）について比較検証し、それぞれの共通点や相違点を明らかにしたという。30年前とはいえ、よくこんなプライバシーに踏み込む調査を実施できたものだと思う。

さて、「健康な家族」に共通する特徴をすべて紹介したいところだが、紙面の関係上一つだけに絞らせていただきたい。それは「家庭内の秩序が保たれている」ということである。「健康な家族」では、親が決定権を持ち、子供は親の決定に従うという「長幼の序」が明確になっているのに対し、「不健康な家族」では、父親と母親が家庭内で対立し、子供を自分の味方に抱き込もうとするケースがみられるという。最も不幸なケースが、母親に抱き込まれた息子であり、そのような息子は、理由は定かではないが、社会的な自立に向けた発達が阻害され、問題化するケースが多いそうだ。母親が息子の前で「お父さんはバカね」というようなセリフは禁句である。息子の将来のためにも。

社会に目を向けてみると、ここ数年、急激に世の中の秩序が乱れてきてはいないか。学校にはモンスターペアレンツ、病院にはモンスターペイシェント。かつては黙っていても一定の尊敬を集めていた「先生」が受難の時代を迎えている。バラエティ番組では、国会議員の「先生」が、無知な司会者やお笑い芸人に突っ込まれて、タジタジになっている。国の舵取り役は、人気よりも尊敬を集める存在であってほしい。

秩序が失われつつある「不健康な社会」の将来を案じているのは私だけだろうか。

（神ノ田昌博　衛生71回）